

## 青少年音楽文化育成活動としてのオペラ「手古奈」の創作に関する考察

The Opera "TEKONA": As one of the enlightened movements in the history of music for youth

嶋田 由美

SHIMADA Yumi

(和歌山大学教育学部)

高校のクラブ活動や市民団体が上演するオペラの中に「手古奈」という演目がある。これは1955（昭和30）年の春に、文部省社会教育局内に設けられた青少年音楽研究会が主体となって作った青少年のための創作オペラの第一作であった。この「手古奈」は同年6月に開催された文部省主催の青少年音楽指導者講習会において、上演のための講習やモデル上演がされたことにより、瞬間に全国に広がり、高校や一般の職場で相次いで上演されるものとなった。本稿は、このオペラ「手古奈」の創作に至る過程や内容を明らかにし、文部省がこのオペラ上演を通して意図したものを考察することを通して、青少年のための音楽文化育成活動を考える際に資することを目的とするものである。

キーワード：「手古奈」 創作オペラ 青少年音楽研究会 文部省社会教育局 音楽文化育成

### 1. はじめに

高等学校のクラブ活動や市民団体によるオペラ上演に際し、時折選ばれる演目に「手古奈」というものがある。「手古奈」は、題材を日本の民話にとった一幕ものの小規模なオペラである。しかし、この「手古奈」は、1950年代の後半に、文部省が主導し、青少年の音楽活動育成事業の一つとして新しく創作したオペラであり、わが国の戦後の音楽文化史を語る上で、特筆すべきものである。

本研究はこのオペラ「手古奈」の制作及び上演に至る過程を検討し、そこから得られた知見が、今後の青少年の音楽文化育成に資することを目的とするものである。

### 2. 1950年代の音楽文化状況

戦後の復興期には、青少年の音楽活動としてまず合唱教育が全国的な規模で隆盛を迎えることになる。この背景には、1950年前後の文部省による歌唱教育の研究推進や、ウィーン少年合唱団の来日など様々な要因がある。この時期には、学校で合唱教育が盛んに展開されたのみならず、各地で少年少女合唱団が組織されるなど、合唱活動が青少年の文化活動の中心的存在となっていく。「手古奈」制作を推進した文部省社会

教育局の局長をつとめた寺中作雄も、「手古奈」の「序文」で、

我が国の青少年の音楽活動のうち最も目ざましいものは合唱運動であろう。この合唱のための指導書、合唱曲集の楽譜等にはすぐれたものが多く、今後もこの活動がますますよき指導者によって発展して行く事は、地域クラブ活動のためにも喜ばしいことである<sup>1)</sup>。

というように、合唱活動の盛り上がりに触れ、これが地域の音楽文化の活性化に繋がることを期待していた。

一方、時を同じくして、1952（昭和27）年に團伊玖磨の『夕鶴』が発表されたことに端を発し、日本人によるオペラの創作活動が盛んになる<sup>2)</sup>。この様子は、団伊玖磨氏の手になるオペラ“夕鶴”が発表されて大成功を収めたのはすでに三年前のことだが、その後作曲家清水修<sup>（マサ）</sup>氏のオペラ「修禅寺物語」も昨秋十一月大阪で初演するなどわが国にもようやく創作オペラ時代到来の兆しがみられる<sup>3)</sup>。

というように、小編成による「創作オペラ」という名称で新聞紙上でも報じられた。関西で、「日本人の脚本を日本人が作曲した創作オペラを演る<sup>4)</sup>」という目的で「小編オペラ運動」を展開した武智鉄二は、

オペラを日本人のハダにピッタリとなじませるためにはどうしても創作オペラをやらなければならない。しかしグランド・オペラをやっている人はま

ず経済的にも成り立ちません。経済的に成立つ小形式の創作オペラをやっていくのが最善の道でしょう。とにかく地に足のついたオペラをやっていきたい<sup>5)</sup>。

と、日本人の脚本および作曲になる小編成の創作オペラ運動への意欲を表していた。

このような動きに触発された形で、早くも 1955 (昭和 30) 年春には、大阪で「脚色、作曲、装置から出演まで、すべて学生たちの手になるオペラ<sup>6)</sup>」が上演された。これは大阪音楽短期大学の学生たちによる「竹取物語」の上演であったが、『教育音楽』では、

学生たち自身の曲からこのような意欲が湧き上って来ていることは、将来のわが楽壇のみならず、一般社会にも明るい希望を与えることである<sup>7)</sup>。

と、青少年の音楽文化活動を発展させる素地として高く評価されていた。

さらに、演劇の分野でも、1950 年代中頃から青少年を対象とした演劇普及活動が活発に展開されるようになってきていた。その直接的なきっかけは 1953 (昭和 28) 年のサムイル・マルシャーク作『森は生きている』(湯浅芳子訳)の出版であり、これに基づいた俳優座こどもの劇場における『森は生きている』の上演(1954 年)であろう。

一方、民間のこのような青少年の演劇普及活動と平行して文部省内にも、青少年演劇研究会が組織され、『脚本シリーズ』や『少年演劇名作集』が相次いで発刊され始めていた<sup>8)</sup>。

このように 1950 年代には社会全体における合唱活動の隆盛、創作オペラブーム、或いは青少年を対象とした演劇普及のための活動などがあり、それらが文部省によるオペラ『手古奈』を生み出す素地となっていたと言える。

### 3. 文部省青少年音楽研究会の設立

文部省社会教育局内に組織された青少年演劇研究会が青少年の演劇活動のための『脚本シリーズ』を刊行すると、次第に、この脚本を使ったオペラの制作が企図されるようになる。このあたりの状況について、文部省社会教育局芸術課の小林源治は、

文部省では毎年一回、全国の青少年の音楽指導者、学校の先生方のため講習会(ママ)を用いて居ります。一昨年の講習会の際、私が以前から素人で上演出来るオペラの台本を作る構想を持つて居る事を一部の聴講生諸君に洩らしたところ、忽ち全員に話が洩れ、とうとう「文部省は我々で上演出来るオペラ台本を作るべし」と決議されてしまいました<sup>9)</sup>。

と、文部省によるオペラ制作の発端を語っている。実際には小林はこの数年前からオペラの制作を考えていたようであるが<sup>10)</sup>、このような現場教師からの要請

によりやく応える形で、文部省内には演劇に続き音楽部門でも青少年音楽研究会が組織された。これは、「青少年が楽しみながら上演出来る歌劇の台本を作る事<sup>11)</sup>」を主たる活動として掲げながら、青少年の音楽文化運動の中心的役割を担っていこうとするものであった。この青少年音楽研究会は、和田精(演出家)、吉田謙吉(舞台美術家)、山根銀二(音楽評論家)、小林源治(作曲家)、青山圭男(演出家)、安東英男(演出、作詞家)、菅原明朗(作曲家)の7人の常任メンバーで構成されており、随時、他に協力者を求める体制のものであった<sup>12)</sup>。

青少年音楽研究会の第一作は後述のように、「手古奈」であったが、設立時には、歌劇のみならず様々なジャンルの音楽を扱っていこうとしていた模様である。小林は当初の予定を次のように語っている。

今後音楽劇、人形劇、音楽物語のような各種の台本、又各種の対象をその難易の別に分けて、[Ⅰ]、中学生程度の技量で上演出来るもの、[Ⅱ]、高校生程度に適當なもの、[Ⅲ]、一般職場で上演を適當と思うもの、[Ⅳ]、[Ⅴ]より稍高度の技量を要するもの、[Ⅵ]、その他の五つの段階のものを作りたいと思つて居ります<sup>13)</sup>。

つまり、青少年音楽研究会には、中学や高校の学校教育の場のみならず、職場や一般社会向けの音楽作品を提供する活動を精力的に展開し、広く青少年の音楽活動の普及を促していこうという意図があったようである。しかしながら実際には、幾つかの小編のオペラの制作の他にはこの名称の団体が制作したものが見当たらないことから、実際の制作の過程で様々な困難に直面して次第に活動が滞っていったものと推察される。

## 4. オペラ「手古奈」の創作と上演

### 4.1 「手古奈」の制作過程

文部省が制作するオペラの第一作目に選ばれたのは、文部省青少年演劇研究会が編纂した『脚本シリーズ 第四集』中の「真間の手古奈」であった<sup>14)</sup>。この脚本は、「題材を万葉集で名高い真間の手古奈に取り、小寺融吉が書き下ろした青少年用演劇の脚本<sup>15)</sup>」であった。その背景には、地方の合唱団体での上演を考慮し、動きが少なく複雑な演技を要しないもの、費用面で負担の少ないもの、援助を受ける演劇関係者に馴染みのあるものが良いであろうという考えや、「最初は、文部省青少年演劇研究会の編集した脚本シリーズの中から選ぶのがいいだろう」という文部省の思惑があった<sup>16)</sup>。

この『脚本シリーズ』の「真間の手古奈」を基に青少年音楽研究会の安東英男が作詞をし、それに服部正が曲をつけたものが歌劇「手古奈」である<sup>17)</sup>。

その作曲に至る経緯について服部は、

## 譜例 1) 『歌劇 手古奈』の冒頭部分

著作権法により、本歌劇の無断上演、放送、録音及び楽譜、台詞の無断印刷、謄写等は絶対に禁ぜられて居ります。

(歌 劇)  
手 古 奈

資料保存のため、上演の際は配役、上演期日等を必ず青少年音楽研究会へ御通知下さい。

安 東 英 男 詞  
服 部 正 曲  
青少年音楽研究会 編

1 Andante

2 Andantino leggiero

組曲の出

(はま児)

(はま児、いらぬ)

あっちえいたりこちえいたり いっ たい な に を

(くず人)

た だ あ る い て い る だ け だ

(青少年音楽研究会編『歌劇 手古奈』〈青少年音楽台本シリーズ第Ⅰ巻(オペラⅢ)〉  
音楽之友社 1956(昭和31)年11月(初版1955(昭和30)年6月)三版)

昭和三十年一月の末、終戦後、ほとんど往来のなかった菅原明朗先生から「これから、文部省芸術課の小林源治君とそちらへいきたい」という突然の電話があった。〈中略〉この「手古奈」の作曲を一カ月位の間に完成し、これを三月末日までに印刷納本してその年の会計年度に間に合せなければならぬという条件であった<sup>18)</sup>。

と述べている。この服部の回想からは、文部省が当時、慌ただしくオペラの制作に着手した様子が窺えるが、これは、文部省が毎年開催していた6月の「青少年音楽指導者講習会」に間に合わせるためであったことは明らかである。

安東の易しい口語体による台本を見た服部は、「日本の若人たちが自らやるためのオペラを書くということちょっと、楽しい仕事である<sup>19)</sup>。」と感じ、僅か二週間の間に、一気に約50分の一幕物のオペラ「手古奈」のピアノ・スコアを完成させてしまったということである。その冒頭部分は譜例1)に示す通りである。

当初は、このようにピアノの伴奏譜のみが作られていたが、これは一つには文部省の予算が少なかったことと、もう一つには、「最悪の場合はピアノ一台だけでも上演出来る<sup>20)</sup>」という、一般社会へのオペラ普及のための意図があった。なお、後に出版された「手古奈」の台本には、少人数のオーケストラ、リードバンド、木管の完備したブラスバンド、或いはスイングバンドのための編曲への示唆も示されていた<sup>21)</sup>。

ところで、この「手古奈」は、出版された台本の表紙には、「オペラⅢ」、つまり「一般職場で上演を適当と思うもの」の分類に表記されているが、実際には高校生も対象としているものであった。「オペラⅢ」と表記されたのは、筋書きに求愛の場面があることによっている。しかし、

分類の「Ⅲ」として作ったものですが、技術の上から見れば「Ⅱ」の段階、即ち変声期を過ぎた高校生で充分こなし得る作品です<sup>22)</sup>。  
と但し書きが加えられていた。



資料1) 「第3回文部省青少年音楽指導者講習会」日程

第3回文部省青少年音楽指導者講習会						場所 一ツ橋講堂 期間 昭和30年5月30日～6月3日				
日	時	9.00	10.00	11.00	12.00	1.00	2.00	3.00	4.00	5.00
第1日 5月30日 (月)			受付	局長挨拶 本年度講習会の方針 小林源治	休 憩	ロマン主義について 中島健蔵		オペラの構成と編曲について 菅原明朗		
第2日 5月31日 (火)		音楽鑑賞講座(第2回) ドイツロマン主義音楽について 土田貞夫			//	セリフについて 和田 精		指揮法 服部 正		
第3日 6月1日 (水)		音楽鑑賞講座 フランスロマン主義音楽について 清水 脩			//	舞楽(雑楽)見学(皇居内)				
第4日 6月2日 (木)		舞台美術について 吉田謙吉			//	*手古奈、モデル上演		演出演技について 原 信子, 安東英男		
第5日 6月3日 (金)		音楽鑑賞講座 国民主義音楽について 小林源治			//	最近の欧州のオペラ、バレエ界について 青山圭男	質疑 講師全員	青少年の音楽活動の育成について 討論会		

この講習会は ① 青少年が楽しみながら上演出来る歌劇 \*手古奈。(安東英男作詞, 服部正作曲, 文部省依囑製作)を中心として行う。出演は東京歌劇協会員。  
② 鑑賞講座は前年度の中世, 古典時代につづく第2回ロマン主義, 国民主義音楽とする。

(文部省社会教育局『社会教育の現状』(昭和31年度版)1957(昭和32)年3月)

#### 4.2. オペラ「手古奈」のモデル上演と講習会

こうして制作されたオペラ「手古奈」は、1955(昭和30)年6月2日、東京一ツ橋講堂において、第3回青少年音楽指導者講習会の一環としてモデル上演された。この講習会の日程は資料1)に示すとおりである。

この初演の歌唱指導を担当したのは原信子であり、出演者も原の門下生が中心となっていた模様である。出演者は衣装も身につけており、また舞台美術、照明も備えていたという意味でまさにモデル上演であったと言える。

この直後の『教育音楽』7月号には、「オペラ普及運動 第一回作品『手古奈』」と題して当日の舞台の写真が数枚、掲載されていた。

この講習会自体の目的が資料1)の日程表の下部に見るように、「青少年が楽しみながら上演出来る歌劇“手古奈”を中心として行う」というものであり、このモデル上演の前日までの講習では、菅原のオペラに関する講話やこのオペラの作曲者である服部による指揮法の指導などが講習内容に組み込まれていた。そして当日は「手古奈」のモデル上演に引き続き、歌唱指導者の原と作詞者の安東による演出や演技の講習まで行なわれていた。

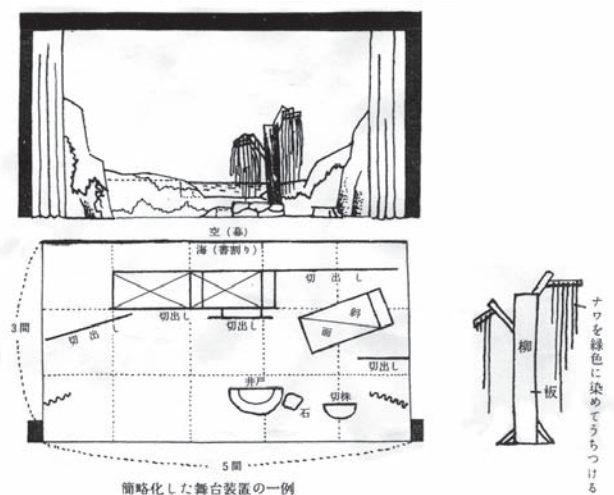
#### 4.3. 『歌劇 手古奈』の出版

この青少年音楽指導者講習会は「手古奈」の台本に基づいて行なわれたが、この台本は、別途、文部省芸術課から都道府県教育委員会社会教育課を通して全

国に無料配布されていた<sup>23)</sup>。しかし、部数も少なく、また衣装等の資料も載せられなかったため、1955(昭和30)年6月に音楽之友社から「青少年音楽台本シリーズ第1巻」と銘打って、『歌劇 手古奈』が出版された。

出版された台本には、資料2)の簡略化した舞台装置の一例や、資料3)の衣装や小道具の図も示されていた。

#### 資料2) 「手古奈」の舞台装置の一例



(青少年音楽研究会編『歌劇 手古奈』(青少年音楽台本シリーズ第1巻(オペラⅢ))  
音楽之友社 1956(昭和31)年11月(初版1955(昭和30)年6月)三版)

## 資料4) 「第4回文部省青少年音楽指導者講習会」日程

第4回文部省青少年音楽指導者講習会

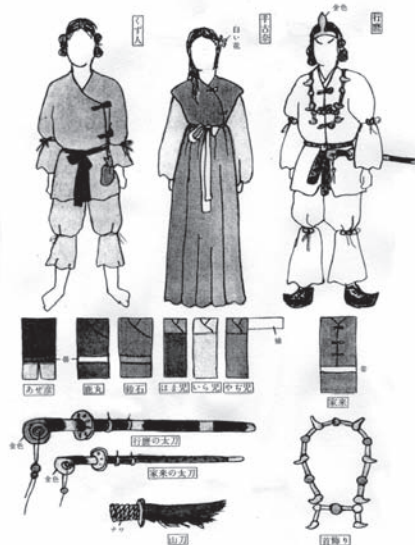
場所 神田一ツ橋講堂 期間 昭和31年7月31日～8月4日

時 日	9.00	10.00	11.00	12.00	1.00	2.00	3.00	4.00	5.00
第1日 7月31日 (火)		受付	局長挨拶	本年度講習会 の方針 小林源治	休 憩	編曲と指揮法 陶野重雄, 小林源治	オペラの歌唱法 永井智子, 平山寮 (ピアノ)		
第2日 8月1日 (水)	劇音楽について 菅原明朗				//	舞台美術の製作について 村上鉄太郎	セリフについて 安東英男		
第3日 8月2日 (木)	音楽鑑賞講座 (第3回) 近代の音楽 有坂愛彦				//	日本音楽器株式会社志村工場見学 練馬自衛隊中央音楽隊プラスバンド演奏 荒井基裕 (テノール) 外			
第4日 8月3日 (金)	音楽鑑賞講座 現代の音楽 三浦 潤				//	演出と演技について ( *牛若丸。モデル上演及び研究) 安東英男, 青山圭男, 陶野重雄, 村上鉄太郎, 菅原明朗 永井智子, 佐久間茂高, 東京放送管弦楽団			
第5日 8月4日 (土)	舞台美術について 吉田謙吉				//	*手古奈。モデル上演 実演	賀瀬応答		

この講習会は ① 青少年が楽しみながら上演出来る歌劇 \*牛若丸。(佐久間茂高作詞, 小林源治作曲, 文部省依囑製作) を中心として行う。出演は中央区紅葉川中学校生徒。  
② 鑑賞講座は前年度までの中世, 古典, ロマン主義に引きつづく近代, 現代の音楽で, 今回をもって終了する。

(文部省社会教育局『社会教育の現状』(昭和31年度版) 1957 (昭和32) 年3月)

## 資料3) 「手古奈」の衣装と小道具



(青少年音楽研究会編『歌劇 手古奈』(青少年音楽台本シリーズ第I巻 (オペラⅢ))  
音楽之友社 1956 (昭和31) 年11月 (初版1955 (昭和30) 年6月) 三版)

加えて、  
伴奏は〈中略〉ピアノかオルガンでいいとされているが、それでも適当な伴奏者が得られない場合を考慮して、管弦楽の伴奏用LPレコードも特製されている<sup>24)</sup>。

というように、管弦楽伴奏のLPレコードも用意され、

「憶えのわるいものにはレコードよりおぼえさすということもできる<sup>25)</sup>。」とも示唆されていた。

このように、オペラ上演のための様々な面での配慮を備えた台本の在り方に、当時の文部省の青少年のための音楽普及活動にける意気込みの一端が窺える。

## 4.4. 「手古奈」の普及

このようにして文部省主導で上演が推進された「手古奈」は、各地の学校や音楽界に広がり、台本の出版後、瞬間にかなりの上演回数を数えるに至った。その数は、

〈「手古奈」の発表〉以来一年間に正式に上演許可と指導を受けた団体の公演は百回、以上無断で上演されたものを加えれば、恐らく二百回ぐらい、オペラ史の記録を破るくらいの上演をみました<sup>26)</sup>。という程のものであった。

文部省の小林によると、当初は、一般市民向けのものとして発表したにも拘らず、上演回数の内訳では高校におけるものがトップを占め、次いで市民団体による上演が多く、さらには中学校での上演もかなりあったようである<sup>27)</sup>。これは、青少年に「自分達でオペラする楽しみを与える<sup>28)</sup>」という文部省の意図が実現されたものであると言えよう。作曲を担当した服部も、「日本の青年たちが自分の手で上演できる日本の音楽を待ちのぞんでいることがわたくしによく理解できた<sup>29)</sup>。」と語っている。

## 5. オペラ「手古奈」がもたらしたもの

このような「手古奈」の成功と、現場からの次作を待ちわびる声に応え、文部省は「手古奈」発表の翌年、即ち1956（昭和31）年には、「[I] 中学生程度の技量で上演可能のもの」に分類される「牛若丸」を制作した。そして、その年の夏に開催された「第4回文部省青少年音楽指導者講習会」において、「手古奈」の再演と共に、この「牛若丸」も中央区紅葉川中学校生徒によりモデル上演された<sup>30)</sup>。（資料4）

この青少年音楽研究会という会自体が、文部省社会教育局に組織されたものであり、文部省もここでの活動を通して、学校を含めた地域の音楽文化の育成を目指していた。そして、次第に文部省のこの意図が反映され、「手古奈」や「牛若丸」のモデル上演がされた「青少年音楽指導者講習会」の受講者の職種にも広がりが見られるようになり、第4回目の講習会では、

受講者の3分の1が教育委員会、公民館、図書館関係、一般音楽団体および工場関係、3分の2は学校教職員であった<sup>31)</sup>。

というものであった。もっとも文部省も地域の音楽文化振興のためには、

この受講者の大部分を占める学校教職員が学校以外に地域音楽文化団体の指導者をかねているものが大部分である。従って地方における音楽文化活動には有能な学校教職員を動員することが大切である<sup>32)</sup>。

というように、学校が中心的役割を担うことを大いに期待していた。これは『教育音楽』などの雑誌に掲載された一連の青少年オペラに関する記事の量や内容からも明らかである。

このような文部省による青少年のための音楽普及活動の結果、短い期間にあちこちでこれらのオペラが相次いで上演され<sup>33)</sup>、文部省は「牛若丸」上演の2年後には、

演劇、舞踊、美術等を結びつけた総合的音楽運動として、このオペラ運動は好評をもって迎えられ、今日では全国各地にわたり推定一千回以上の上演をみている模様である<sup>34)</sup>。

と自負するに至っていた。

一方、講習会受講を希望する地方の関係者の要望に応える形で各地で、モデル上演を省いた形式の講習会開催も企画されたようである。例えば、滋賀県では、最近滋賀県の教育委員会が東京に遠い関西以西の人達にも講習を受けさせてあげたいという熱意で、今年秋、滋賀県で講習会を開催する計画を持っているようです<sup>35)</sup>。

というように、県下のみならず関西以西という広い地域の関係者を対象とした講習会を企画した様子も報じられていた。

このような文部省の音楽文化推進活動はやがて地方におけるオペラ研究会の結成というような形でも成果を挙げ始める。例えば、1959（昭和34）年頃には、札幌、青森、山形、岐阜、山梨、大阪、和歌山、広島、高知の各地に「青少年オペラ研究会」が誕生していた<sup>36)</sup>。また、翌年1月には「教育オペラ研究会」が主催する初めての「教育オペラ公演」の予告記事も新聞に掲載されていた<sup>37)</sup>。

このように、当初、文部省が目指した「青少年が楽しみながら上演出来る歌劇」の創作と普及活動は、各地での上演回数やオペラ研究会の設立という事実からも、形の上ではかなりの成果をもたらしたと言える。しかし、その一方で、青少年音楽研究会の作ったオペラの音楽作品としての質に対しては批判的な意見があったことも否めない。そのごく初期のものは「手古奈」初演のわずか2ヵ月後に出版された次のような批評であろう。ここでは、「手古奈」について、

条件のわるい所でも何とか上演できるように作られている。従つてどのパートも歌は技巧的に困難がなくうたい易く、音域も無理なく楽に書かれている<sup>38)</sup>。

というように、青少年や一般職場向きに上演しやすく作られていることを評価しながらも、

確に青少年歌劇運動のテキストとして見事にできているが、しかし、多くの制約に拘束された為か、肝心なこの作が無難な出来の域にとどまり、劇的にも、音楽的にも心に迫るものが希薄なのが惜しい<sup>39)</sup>。

と、音楽作品としての質に対する苦言が呈されていた。

## 6. おわりに

考察してきたように青少年音楽研究会が制作したオペラ「手古奈」は、文部省が開催した講習会を経て最初は学校関係者による上演によって各地で広がりを見せた。その後、「手古奈」や「牛若丸」などのいわゆる文部省オペラ、或いは青少年オペラといわれるオペラ上演は、

近年は一般合唱団でも上演するようになり、演劇における自立劇団にあたる歌劇研究団体が、県内各地を巡公演し、オペラを見る機会のない人達にも喜びを与えている<sup>40)</sup>。

というように、地方の音楽普及のための重要な活動のひとつとなっていた。

青少年音楽研究会はその後、幾つかのオペラ作品を発表したが、今日、上演される機会が残されているものは殆ど「手古奈」に限られていると言える。「手古奈」に関しては、本論で考察した1950年代以降も、高等学校の合唱クラブ活動の一環として発表されたり、市民団体によるオペラ上演の際の演目として選ば



れてきたようである。例えば、1993（平成5）年3月に富山市民オペラの第一回公演の演目として選ばれたのはこの「手古奈」であった。当日の様子は、

“市民による手づくりオペラ”を目指し、五カ月間にわたって厳しい練習を積んできたキャストや市民オペラ管弦楽団、合唱団。陰で舞台を支えた実行委スタッフなど大勢の人の情熱が、見事にステージに結晶した瞬間だった<sup>41)</sup>。

と新聞に報じられたように、満員の聴衆を感動させるものであったようである。続けて、『手古奈』の成功は、オペラが市民へ浸透していく大きなステップとなったに違いない<sup>42)</sup>。」とも記されていたが、高度な歌唱技術を要しない一幕物の小編オペラ「手古奈」は、こうしたオペラの啓蒙活動にとっては選ばれやすい演目と言えよう<sup>43)</sup>。

本論では「手古奈」発表の前後約10年間のみを考察の対象としてきたが、このように今日に至ってなお、この演目が上演されていることを考えると、青少年音楽研究会が上演を推進した以降の「手古奈」の上演に関する記録も収集し、その上演経緯などを詳細に検討することが必要であろう。音楽作品としての質はともかくとして、「手古奈」が演目として選ばれ続けていることに、これが青少年音楽文化の育成活動の題材として評価されていることが裏付けられる。このような「手古奈」の上演に際する地方の様々な状況を検討することを通して、青少年や地方の音楽文化普及のための今日的課題に対処する手立てが得られると考える。

## 註

- 1) 青少年音楽研究会編『歌劇 手古奈』〈青少年音楽台本シリーズ第Ⅰ巻（オペラⅢ）〉音楽之友社 1956（昭和31）年11月（初版1955（昭和30）年6月）三版 p.1
- 2) 例えば1954（昭和29）年11月号の『教育音楽』（第9巻第11号）には、「今シーズン相ついで上演される創作オペラ」と題した記事が掲載されているが、そこには「修禅寺物語」「聴耳頭布」「河童譚」などの他にも数本の作曲中のタイトルが見られる。
- 3) 「誕生する“小編オペラ” 五月には大阪で初興行」『朝日新聞』第24753号 1955（昭和30）年1月4日（火）第7面
- 4) 同上。
- 5) 同上。
- 6) 「学生ばかりの創作オペラ」『教育音楽』第10巻第4号 1955（昭和30）年4月
- 7) 同上。
- 8) オペラ「手古奈」の原作である「真間の手古奈」は『脚本シリーズ』の第4集（1953（昭和28）年8月）に掲載されているが、それまでに『脚本シリーズ』では19種の演目が発表されていた。『少年演劇名作集』は1953（昭和28）年4月の発行。また同会は1955（昭和30）年11月には『脚本の書き方と選び方』も発行している。
- 9) 小林源治「オペラは私達にも出来る」『教育音楽』第11巻第8号 1956（昭和31）年8月
- 10) 『教育音楽』第10巻第4号（1955（昭和30）年4月）に、1948年頃から小林の胸中にはオペラ創作の希望があったことが記されている。また同様の内容の記事が1959（昭和34）年7月27日付『朝日新聞』にも見られる。
- 11) 小林源治「青少年のための歌劇『手古奈』」『教育音楽』第10巻第8号 1955（昭和30）年8月
- 12) 同上。
- 13) 同上。
- 14) 文部省青少年演劇研究会編『脚本シリーズ（第四集）』1953（昭和28）年8月 教育弘報社
- 15) 「歌劇『手古奈』」『教育音楽』第10巻第8号 1955（昭和30）年8月
- 16) 註1）に同じ。pp. 2-3
- 17) 「手古奈」については新聞や雑誌記事ではオペラと表記されているが、台本では「歌劇」という名称が付けられている。本論文中では、各々の資料の出典に基づいてオペラと歌劇の両表記を使用している。
- 18) 服部正『広場で楽隊を鳴らそう』1958（昭和33）年1月 平凡社 p.213
- 19) 同上。p.214
- 20) 註1）に同じ。p. 9
- 21) 同上。
- 22) 註11）に同じ。
- 23) 同上。
- 24) 註15）に同じ。
- 25) 同上。
- 26) 註9）に同じ。
- 27) 同上。
- 28) 註1）に同じ。
- 29) 註18）に同じ。p.215
- 30) 文部省社会教育局『社会教育の現状』（昭和31年度版）1957（昭和32）年3月 pp.72-73
- 31) 同上。p.72
- 32) 同上。
- 33) 学校関係者が中心となって地方で青少年向けのオペラ上演活動を行った一事例に関しては、那須祐哉「戦後田辺地方における音楽文化の発展に関する考察 —『紀伊民報』掲載記事と聞き取り調査を中心として—」（和歌山大学教育学部2005年度卒業論文）を参照。
- 34) 文部省社会教育局『社会教育の現状』（昭和32年

- 度版) 1958 (昭和 33) 年 3 月 p. 127
- 35) 注 11) に同じ。
- 36) 「“文部省オペラ”に人気」(『朝日新聞』第 26405 号 1959 (昭和 34) 年 7 月 27 日 (月) 第 9 面) の記事の中に、小林源治氏談として記されている。
- 37) 「教育オペラ公演」『朝日新聞』第 26580 号 1960 (昭和 35) 年 1 月 20 日 (水) 第 12 面
- 38) 注 15) に同じ。
- 39) 同上。
- 40) 注 34) に同じ。
- 41) 「『手古奈』感動のステージ」『北日本新聞』第 38332 号 1993 (平成 5) 年 4 月 3 日 (土) 夕刊 第 6 面

- 42) 同上。
- 43) 『演劇と教育』第 543 号 (2002 (平成 14) 年 4 月) には、前年秋に横浜市青葉区で青葉区中高生ミュージカルとして「手古奈」が上演され、続いて 3 月には手古奈伝説の地である千葉縣市川市でも再演されたことが報告されている。ただし、この作品は、文部省制作の「手古奈」に出演したことのある校長の発案で、これを中学生版にした脚本に新しく曲をつけて中高生ミュージカルとしたものであった。このような文部省のオペラ「手古奈」に端を発した形の新しい取り組みも、今後の青少年の音楽文化育成活動に発展される可能性のあるものであろう。